

2021年9月26日 礼拝説教要旨

詩編講解説教79「赦しが成り立つために」

詩編79：8～13、マタイ18：21～22

詩編第79編は「民の嘆きの詩編」に分類されます。「神よ、異国の民があなたの嗣業を襲い、あなたの聖なる神殿を汚し、エルサレムを瓦礫の山としました」（1節）この言葉の背景には明らかにバビロニアによる侵略とその後の捕囚の出来事があります。それはわたしたちとは関係のない遠い昔の話のように感じるかもしれませんが、しかし、例えば戦争で家族や友人を失う、家や財産を失う経験をした人たちがいます。戦争や災害、事故による喪失体験は、わたしたちの心に深い傷を残します。それは怒りや憎しみ、悲しみ、絶望、それらが複雑に入り組んで、もはや自分ではその傷を癒すことはできません。詩編の御言葉は、そのようなわたしたちの感情、心の動きを見つめています。

その感情の中心を占めるものに怒りがあります。その怒りはもちろんわたしたちの側の怒りなのですが、詩編79編において、詩人はこの怒りを神さまの怒りとして表現します。はじめその神さまの怒りは、自分たちの罪、過ちに対する神さまの怒りとして表現されます。「主よ、いつまで続くのでしょうか。あなたは永久に憤っておられるのでしょうか。あなたの激情は火と燃え続けるのでしょうか」（5節）ところがその怒りが今度は自分たちから自分たちを苦しめる者たちへ向かいます。「御怒りを注いでください。あなたを知ろうとしない異国の民の上に、あなたの御名を呼び求めない国々の上に」（6節）さらにその怒りは神さまの報復として表現されます。「主よ、近隣の民のふところに、あなたを辱めた彼らの辱めを七倍にして返してください」（12節）自分たちの怒りがいつのまにか神さまの怒りへと変わり、自分たちに向けられた神さまの怒りから、更には自分たちを苦しめた者たちへの神さまの怒り、復讐へと変わる。このような怒りの変遷、それは何を意味しているのでしょうか。

人間が怒りに支配されてしまう時、そこでは何が起きているのでしょうか。創世記のカインとアベルの話の思い起こしてみます。自分の献げ物が顧みられなかったことでカインは怒ります。「カインは激しく怒って顔を伏せた。主はカインに言われた。どうして怒るのか」（創世記4：5～6）この怒りが弟アベルに向かいカインは弟を殺してしまう。この話で大切なことは、神さまはカインに「もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める」（4：7）と言われた。怒りに震えるカインに対して「怒りに震えるお前は正しいのか」と問われます。そこでは自分自身を見つめ直し、自分の正しさを問うことが求められています。でもカインはそれができなかった。怒りが先行して、自分を見失い、その怒りの矛先はアベルに向かいました。つまりカインは自分の正しさだけで、正義感だけで突き進んだのです。そこに人間の罪があると聖書は教えています。

13節に注目しましょう。「わたしたちはあなたの民、あなたに養われる羊の群れ。とこしえに、あなたに感謝をささげ、代々に、あなたの榮譽を語り伝えます」（13節）ここは怒りに震える神の民がふと我に立ち返り、自分自身を見つめるようなところです。「わたしたちはあなたの民、あなたに養われる羊の群れ」わたしたちは誰か。それは「あなたの民」であり「あなたに養われる羊の群れ」である。敵に全てを奪われ、全てを失ったイスラエル。でもそれは神さまの民であり、神さまに養われる群れなのだ。そしてその民が「代々に、あなたの榮譽を語り続けます」と言います。ここに生きる使命が示され、イスラエルは自分を取り戻していきます。

そのとき詩人は気づくのです。「どうか、わたしたちの昔の悪に御心を留めず、御憐れみを速やかに差し向けてください」（8節）それは自分自身の罪です。「昔の悪」これまで自分が犯してきた罪、咎。自分を見つめる中でそれを思い起こす。それゆえに神さまの怒りはまず自分に向けられる。自分の怒りから神さまの怒りに変わる瞬間がそこにあります。そして更にはこの神さまの怒りが自分から自分を苦しめる者へ変わる。義を貫かれる神さまは必ずその代償を支払わせます。イスラエルを苦しめたバビロニアはペルシャによって滅ぼされました。イスラエルの民はそこに七倍の神さまの復讐を見たのかもしれませんが。

しかしわたしたちはイエス・キリストの救いを知っています。本来、自分に向かうはずの神さまの怒りの矛先は、イエス・キリストに向けられました。キリストが神さまの怒りを全て引き受けてくださった。それが十字架です。十字架において、キリストがその命をもって、わたしたちの罪の代償を支払い、わたしたちは赦されたのです。そこにわたしたちが怒りから解放される道があります。

そしてそれはただ怒りから解放されるだけではありません。教会は赦しを語ります。主の祈りでは「我らの罪をもゆるしたまえ」と祈ります。使徒信条でも「罪の赦しを信ず」と告白します。わたしたちは、キリストのよみがえりの命によって、怒りではなく、まったく新しい赦しに生きるように導かれるのです。教会は自分で怒りをコントロールするというような、テクニカルな方法論を教えているわけではありません。キリストによって罪から救われる時に、わたしたちはこの怒りから解放され、さらには赦しに生きるように導かれるのです。「七倍にして返してください」（79：12）という復讐の生き方から主イエスが教えられたように「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」（マタイ18：22）という生き方への飛躍。キリストの十字架とよみがえりの御業がそれを可能にします。